０７・七緒はセンパイが好き

とある年の春。五月二十七日、金曜日。十時ごろ。
日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市……から、別の都市に向かう電車の中。
天気は晴れ。室温は二十五度。
このひと月で、すっかり過ごしやすくなった。

場所は、電車の中。
主人公は今、車内の二人掛けの椅子に七緒と並んで座りながら、少々うとうとしている。
昨日も時間ギリギリまで、イラストの仕事に励んでいたからだ。

そんな主人公は、夢を見ている。
『これは夢だ』と、自分でわかる夢だ。
その夢の中で主人公は、小さな七緒を膝に乗せている。
うっとりとした心持ちで、その温かな身体を抱きしめ。子ども特有の、柔らかくてきらきらの髪の毛にそっと触れながら、幸せな気持ちに満たされている。
……どうやらこの夢において、主人公と七緒には、ずいぶんと歳の差ができているらし

い。
主人公は現実と同じ姿だが、七緒の姿は、現実の年齢に、どう見てもマイナス十二以上はされている。
その上二人は幼馴染らしく、主人公はミニ七緒の面倒を見るのが当然の間柄になっているようなのだ。
このような不思議な世界で、幼い七緒は、すっかり主人公に心を許している。
主人公にしっかりと抱きつき、くっついて眠そうにしていて。
むにゃむにゃと主人公の名前を呼んだり……主人公の胸にほおずりしたりしながら、満足げだ。
そこには、一切の不安や迷いはない。
今の七緒は『主人公であれば、絶対に自分を守ってくれる』と確信しているようだ。
――だから、主人公は気づいた。
……あー、そうか。
わたしのなーへの想いって、つまりはこういう事なんだ。
と。

夢の世界で、小さな体温を感じながら。
主人公は、これまでいまいち言語化されていなかった、七緒への愛情の本質を理解した。

そっか。
……つまりわたしは、ずっとなーの『幼馴染のお姉ちゃん』になりたかったんだ。
こんな風に、なーがちっちゃい時からずーっとそばに居て。
現実で、自分の弟や妹にしてるみたいに一杯優しくして。
一瞬も淋しいとか、怖いとか思う瞬間がない位一緒にいて。
たくさん、たくさん安心とか、幸せをあげたいと思ってたんだ。

なるほどなぁ。
だからわたしは『なーみたいな女の子と、幼馴染になる作品』なんてものを作ったんだな。
自作えっち漫画で真面目な本音に行きつくのって、ちょっと面白い感じだけど……でも、創作って、もしかするとそういうものなのかもなぁ。
何気なく描いたものとか、えっちな欲望が炸裂してる作品の中に、ささやかな祈りみたいなピュアな気持ちが隠れてて。

描き終わってずいぶん経ってから『ああ、あれってそうだったんだ』って気づくんだ。
と。
だから主人公は思った。

よし。
目ぇ覚めたら、なーにこの夢の事を話そう。
『わたしはそれ位、なーが大好きなんだよ』って、言おう。
まぁまぁっていうか、かなり恥ずかしいし、話を聞いたなーは何て言うか、ちょっとわかんないけど……。
きっと喜んでくれるような、気がする。
ようし……。今はこのちっちゃいなーのあったかさとか、柔らかさを忘れずに起きよう。
こんないい夢が見れる事なんて、めったにないからな。

そんな風に想いながら、小さな七緒をぎゅうっと抱きしめた。
だが、この幸せな夢は、ここでしゅわりと弾ける。
……電車の揺れとともにふいに目が覚め、堪能する機会を失ってしまったからだ。

SE1　電車の環境音
【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】
【0―5秒ほど流して『七緒』のセリフ】
【その後、音量が小さくなる】
【トラック終了まで流し続ける】

●左　3センチ
「【くすくす笑いながら、にやにやと、嬉しそうに主人公を呼ぶ。
電車の二人掛けの椅子に並んで腰かけ、主人公のすぐ隣にいる。
七緒と主人公は一緒にこの電車に乗り、しばらくが経過した。
しかし、乗車時は大変ハイテンションだった主人公が、無事に電車に乗れた事で安心したのか、だんだんうとうとし始めた。
そしてとうとう、つい先ほど寝てしまった。
なので『このまま寝かせてあげよう』と思っていたが……電車の揺れで、すぐに主人公が目を覚ましたので】
あ❤
起〜きた♪」

〈主人公〉
「ひゃっ！」

だから主人公は、驚いて、椅子に座ったままビョンと背筋を伸ばす。
それから慌てて……声のした方向。つまり、七緒の居る方に向き直った。

これによって声の方向は『左』から『正面』になる。

●正面　15センチ
「【声は弾みつつ、にこやかに。正面から主人公を見つめて。
主人公が期待通りのリアクションをしてくれたので】
おはようございます、先輩」

七緒、顔を近づけて主人公を愛おしげに見つめると、当然のようにキスをしてくる。

●正面　0センチ
「【※1回※　キスする。　瞼に、軽く音を立ててキスする】

ちゅ❤」

〈主人公〉
「ん……❤」

まったく、七緒と来たら。
まさか、こんな所でもキスをしてくるとは。
平日で電車が空いているとはいえ、主人公の恋人は、今日もやりたい放題だ。
だが、それを『ん……❤』などと言って、自然と受け入れている主人公もまた主人公である。
隙あらばちゅっちゅしまくるこの生活に、すっかり慣れ切っているのだ。
しかしその辺は『今回は特に誰も見ていなかった』『というか、周囲に誰も乗っていなかった』という事で、大目に見てほしい。

〈主人公〉
「うわっ……うとうとしちゃってた……！
なー、わたし、どの位寝てた？」

なので主人公は、キスの件にはもはやつっこまず、寝ぼけ眼で尋ねる。
すると七緒は、そんな主人公の顔を嬉しそうにのぞき込みつつも、会話するために少し離れた。

●正面　１５センチ
「【穏やかに質問に答える。
今回は本編トラック０１の時とは違い、本当に、ほんの少ししか時間がたっていないので】
ん？
うとうとされてただけですから、一分も寝てないと思いますよ。
【穏やかに。
しかし、ちょっと可愛く心配しながら。
主人公は昨日も『夜更かし』判定を受けるギリギリの時刻までイラストの仕事をしていたので】
昨日はギリギリまでお仕事頑張られてたんですから。
行きの電車で位、休んでて下さいよ。
【楽しそうに。
今手に持っている、乗車時に主人公に手渡されたガイドブックを指しながら言っている。

『このガイドブックさえあれば、自分は楽しく時間が潰せるので、主人公がまた眠ってしまっても、全く問題ない』と主張したいので。
事実、主人公が今回の旅行用に購入したガイドブックは、いたるところに主人公による付箋や書き込みがなされており、とにかく情報にあふれている。
それらを見ているだけで七緒は嬉しくなり、この旅行にかける主人公の意気込みが伝わってきて、幸せな気分になる。
なので七緒は『むしろこれを積極的に読んでいたい位である』と思っているので】
私はガイドブック読んでますから♪」

〈主人公〉
「うー……でも……」

主人公、目をこすりながら、あわあわと申し訳なく声をあげる。
昨日、なんとか目標地点まで作業を進め。今朝、きっちり早起きして桐生家まで七緒を迎えに行って。
一緒に地下鉄に乗って市の中心部まで行き、この電車に乗り込むまでは完璧だった。
だが、今の主人公はすっかりこのざまだ。
乗車してすぐ七緒に温かい飲み物をもらったり、膝にブランケットをかけてもらったり。

背中を優しくなでなでしてもらってたりしてるうちにすっかり眠くなってしまい、いつのまにかよだれを垂らしてうとうとしていたのだ。

……ん？

もしかするとわたし、なーに知らず知らずのうちに寝かしつけられてたのか？

さりげなく、眠れるように気ぃ遣ってもらってた？

主人公、ここでこの睡眠が少々意図されたもののような気がしてきてきゅんとなるが、それでも今日は起きていたい。

だって今日は、いくらでも七緒としたい事や、話したい事があるのだ。

●正面　15センチ

「【きゃっきゃと嬉しそうに。

『凄♪』を特に楽しげに、コミカルに。

ガイドブックを見ながら、その書き込み量について述べる。

七緒は今『自分は、主人公が本当に眠ってくれて構わない。だけど、主人公はおそらく気を遣って寝ないだろうな』と思っている。

なので、どちらに転んでも構わないように、ひとまずガイドブックの話を続けている】

ふふ。
先輩の書き込み凄（すご）❤
参考書みたいになってる♪」

〈主人公〉
「まぁ、参考書だからな！　その位読み込んでおかないとなっ」

主人公、七緒に褒められて、フフンと鼻をこする。
当然である。主人公はいつでも予習をかかさず、計画的に学習するタイプなのだ。
ゆえに今回もその生き方の通り、バッチリ勉強してきたのである。
まぁ、その割には、学校の成績はいまひとつではあるが……。

●正面　15センチ
「【にこやかに、穏やかに。
照れて恥ずかしそうにする主人公を覗き込んで『可愛いなぁ』と思いつつ、現在自分達が向かっている『白津リゾート』について述べる。
そこは七緒にとって、生涯縁がないだろうと思っていた場所だった。
白津リゾートは、広大かつ様々な施設のあるリゾート地として人気がある。

だが、主人公達の住む市からはかなり距離があり、主人公達位の年代の若者が、若者だけで遊びに行くのには、少々ハードルが高い。
また、遊園地の入場料一つとっても、非常に高めだ。
具体的には、以前七緒たちが行った『みのり沢スウィートフォレストパーク』の、約三倍の価格設定である。
そのため『こんな高い遊園地、自分は一生行く事はないだろうな』と思っていたので】
白津（しらつ）リゾートって、遊園地あるのは知ってましたけど。
温泉とか、キャンプ場とか、牧場まであるんですね。
【にやにやと、嬉しそうに。
きゃっきゃと主人公をからかい、自分達の宿泊先について述べる。
そこはやはり高めの価格帯で、主人公達位の年代が自力で泊まるには、少々不釣り合いな宿泊地である。
主人公は今回の旅行について『スタンプが思ったより売れたんだ。だから、全部その売り上げから出したから、なーは気にしないでくれよな』と言っている。
だが七緒は『これを『思ったよりも儲からない』事で知られているスタンプの売り上げだけで、捻出したとは考えにくい。実際は、主人公がここ数か月のイラスト仕事で得た報酬の全てを費やして計画した旅行なのではないか？』と思っている。
七緒は、主人公がそこまで努力してこの旅行を用意してくれた事を非常に嬉しく思い、

感激している。
だが『さすがに主人公の負担が多すぎるだろう』とも思っている。
なので、ひとまず旅行中は主人公の厚意に甘えるが、帰宅後は何らかの方法で多少は支払うか、埋め合わせをするべきだろう』と考えている】
しかも私達の泊まるとこ。
何（なん）か『学生さんが旅行』って感じじゃないんですけど。
せんぱぁい。こんないいとこ、ほんとにいいんですか～？」

〈主人公〉
「い、い、い。いいんだよ！
わたしがそこに、めっっちゃ泊まりたかったんだから！
今回は『スタンプの売り上げが一杯ありました記念』の旅行なんだから。
なーは気にせず、楽しんでくれよな！」

主人公、ひきつった顔で目を泳がせながら答えるが、いかにも苦しい。
理由は、七緒が薄々察している通りだ。
実際、スタンプのみではそこまで儲からない。
いくら宣伝してくれた荒井ねねさんが偉大でも、そもそもの単価が安すぎるのである。

だから主人公は、スタンプの売り上げと、これまで請け負ったイラスト仕事の報酬全てをぶちこんで、こたびの旅行を実現した。
しかし、その一部は、締め日の関係でまだ振り込まれていない。
なので……お母さんに頼み込み、同じ額を貸してもらった事で、今、ここに居るのだ。

七緒、慌てふためく主人公の顔を覗き込むと、左耳に話しかける。
これによって声の方向は『正面』から『左』になる。

SE2　七緒が近づく音
【最初から最後まで流す】

●左　3センチ
「【にやにやと、嬉しそうに。
きゃっきゃと主人公をからかう。
早速嘘を誤魔化しきれなくなってきている主人公に助け舟を出すためにも、別の話題を振る】
へえ～❤
何々（なになに）？　つまり先輩は❤

そんなに私の温泉浴衣姿が見たかったって事ですかぁ……❤」

〈主人公〉
「……そ、そうだぞ！
なーの温泉浴衣とか、絶対絶対可愛いぞ。
今から見るのが楽しみだぜ！」

もちろんこれは本音なのだが、主人公、やはり苦しい。
それでも主人公は、この主張のまま押し通すしかない。
『白津リゾート。『高い』『高い』とは聞いていたけど、思ってたよりさらに高かったんです』
『だから、実はかなり無茶をして旅行に来ています！』
などとは、とても言えないからだ。

●左　3センチ
「【にやにやと、嬉しそうに。
主人公が、どの程度本気なのかわからない事を言っているのが面白いので。
おそらく基本的には、七緒の話題そらしに乗っかったのだろうと推測している。

だが、完全に嘘でもないだろうと思っている。
なので、からかう。
やはり七緒は、主人公に性的な目で見られる事が、とにかく嬉しいので】
やっぱり？
【にやにやと、少しわざとらしく】
あ～、どうしよう❤」

七緒、近づいて、左耳にささやく。

★左　ささやき　０センチ　※マークのセリフまでささやく
「【にやにやと、少しわざとらしく。
『あ～、そんな事されたら困っちゃう❤　どうしよう～❤』という感じで。
完全にこの状況を楽しんでおり、からかっている】
私今晩❤　興奮した先輩に色々されて❤
喉枯れる位喘がされたり。
足腰立たなくさせられたりしちゃうのかな～❤」※

〈主人公〉

「……！
あっあっあっあっ……。
いっ、いやぁ！　それもあるけど！　それだけじゃないし！」
七緒、にやにやしながら、少しだけ離れる。

●左　3センチ
「【にやにやと、少しわざとらしく。
一度主人公の顔を覗き込んだあと、左耳近くで話している。
完全にこの状況を楽しんでおり、からかっている。
特に主人公が、慌てふためきながらも『温泉浴衣姿の七緒に主人公が興奮して、色々する可能性がある』という指摘については、全く否定していないのが面白い】
ふ〜ん？
それもあるけど、それだけじゃないんだ？」

〈主人公〉
「そうだ！　そうだぞっ！
わたしはだな！　なーにはまだ予想もつかないような壮大な目的をもって、ここに来て

るんだっ！
決して、なーの温泉浴衣姿が見たいってだけで！
誘った訳じゃないんだからなっ！」

●左　3センチ
「【くすくすと楽しげに笑って。
先ほどと同様に、一度主人公の顔を覗き込んだあと、左耳近くで話している。
完全にこの状況を楽しんでおり、からかっている】
ふふふふふ❤
へぇ、たとえば？」

主人公、なんとかこの場をごまかすために、あえて七緒に正面から向き直って話す。
これによって声の方向は『左』から『正面』になる。

〈主人公〉
「えーっと。そ、そ、そ、それはだなぁ……。
あ！　ガイドブック見たろ？
白津リゾートってさ！　八つもジェットコースターがあるんだぜ！

だからわたし、それを全制覇したくなっちゃったんだよ。
だからここにした訳！」

●正面　１５センチ
「【くすくすと楽しげに笑って。
完全にこの状況を楽しんでおり、からかっている。
当然、今の主人公の主張に無理がある事もわかっている。
主人公は前日譚トラック０７において、ジェットコースター酔いして体調を崩していたので。
またその後、誰かと遊園地に行ったという話も聞かなければ、ジェットコースターの話題を出した事自体、非常に久しぶりなので】
ふーん。ほんとに？
先輩って、そんなにジェットコースターお好きでしたっけぇ」

〈主人公〉
「そうだよ！
……確かにスイパで乗った時は、ちょっとダウンしちゃったけどさ。
あの経験がきっかけで、逆にハマっちゃったんだ！

今は『ジェットコースター最高！』って思ってんのっ」

●正面　１５センチ

「【くすくすと楽しげに笑って。
完全にこの状況を楽しんでおり、からかっている】
ふ～ん？　他には？」

〈主人公〉

「他にはっ。他には、だなぁ……」

主人公、しどろもどろになって指先を合わせてつんつんする。
それからその指を組んだり、左右に動かしたりして、すっかり手がうるさくなっている。
……どうしよう。そろそろネタがない。

●正面　１５センチ

「【息づかいのみで表現する。
『ふーん？』という感じで、疑いのまなざしを向けている】

……」

〈主人公〉
「えーっとその。白津なら空気もおいしいし。
電車で一時間以上離れてるから非日常感も味わえるし。
素敵だな〜。ここでリフレッシュしたいなぁ〜……的な……」

ところでもう、理由がないないならないで『以上だ！』とでも言って堂々としていれば、多少は怪しまれなくなる。
なのに、こうやってなお、無理やり根拠を述べ続けるから、主人公は余計疑われてしまう。
それどころか、七緒はすでにこの疑念を確信に変えているようだ。

●正面　15センチ
「【にやにやとからかう】
へぇ〜。
【少し間をあけてから。
落ち着いた、優しい声になる。

かつ少し申し訳なさそうに言う。
『主人公の考えている事は、すべてお見通しですよ』という感じで】
でも、それだけじゃないでしょ」

〈主人公〉
「えっ⁉　それだけだぞ⁉　本当にそれだけだし！」

そう言った時には、もう遅かった。
七緒は優しく目を細めると、首を傾げて主人公の顔を覗き込み『もう、いいんですよ。わかっていますから』なんて感じの顔をする。
それから小さく息を吸うと、とうとうこの話題を切り出した。

●正面　１５センチ
「【落ち着いた、優しい声で。
かつ、少し申し訳なさそうに。
主人公が例によって自分のために非常に尽くしてくれている上、責任を感じなくていい事にまで、責任を感じているようなので。
『主人公は、前日譚トラック０７での遊園地デートが、自分のせいで残念な結果に終わ

ったと思っている。その上、半年以上たってもこの件を気にしていて、挽回したいと思っているらしい』と理解したので】

わかりますよ。

初デート、やり直そうとしてくれてるんですよね」

〈主人公〉

「いやいやいや！　やっぱり、主に温泉浴衣が目的だから！

可愛くてちょっと珍しい格好のなーが見れて。

ついでに色々遊ぶところもついてるなら、それは遊園地じゃなくてもよかったんだよ！

プールとかでもよかったから！

……あっ」

そして主人公は『あの時』と同種のやらかしをする。

焦るとつい誤魔化そうと口数が増えて、余計な事を言ってしまう。

主人公のこの癖は、まだ直りそうもない。

●正面　15センチ

「【落ち着いた、優しい声で。

かつ少し申し訳なさそうに。
七緒は、前日譚トラック０７での遊園地デートにおいて『雰囲気を悪くしたのは、すべて自分である』と思っているので。
また、主人公が『遊園地にあるジェットコースターが目的で誘った』と言った直後に『遊べるところがあるなら、遊園地じゃなくても構わなかった』と、早速矛盾した発言をした事で『やはり、初デートをやり直したかったのだ』と確信したので】
……もう。やっぱり、今でも気にして下さってたんですね。
行き先聞いた時から、そんな気はしてたんですよ」

〈主人公〉
「えーっと……。その……」

こうなると、もう『違う』で押し切る事はできない。
すべて七緒の推察する通りだからだ。

●正面　１５センチ
「【落ち着いた、優しい声で。
かつ少し申し訳なさそうに。

前日譚トラック０７のデートについて、改めて自分の見解を述べる。
主人公と七緒は、以前にもこの件について話をした事がある。
その結果、この件をお互いに申し訳なく思いつつ、その後はこの時の事を、ちょっとした笑いのネタに昇華できるようになっていた。
だが主人公の中ではいまだこの件が終わっておらず、それが今回の旅行につながったとわかったので】
でも、あの時悪かったのは全部私です。
先輩が責任感じる事なんてないんですよ。
だってあの日、せっかく先輩達が企画してくれたのに。
【※マークまで、『自分自身に呆れている』という感じで。
『ヘラって』つまり『ヘラる』は『精神的に不安定だったとはいえ、正気ではちょっと考えられないような、おかしな行動をした』という意味で言っている】
私ったら、ちっちゃい事ですごい傷ついて。
『もう会うのやめよう』とか言ってヘラって。
完全に頭おかしかったですよね。　※
だから、被害者は先輩の方です。
【穏やかに、だが、真剣に謝る】
※真摯に謝りつつも、『あまりにも『真剣感』が強すぎて、雰囲気が重くなりすぎる』と

いった事がないようにお願いします
あの時は、本当に申し訳ありませんでした」

〈主人公〉
「……そんな事ない。あの時のなーは大変だったんだから。
責任があるとかないとかで言うなら。
行く前から『何か様子が変だな』ってわかってたのに、聞こうとしなかったわたしにだって責任はあるだろ。
とにかくっ。わたしは全然、被害者なんて思ってないからな」

主人公、即座に反論し、七緒を見上げてそっとその手に手を重ねる。
普段、自分達の性格は大きく違うと認識している。
だが、こういう時、二人はびっくりするほど似たもの同士だ。
お互いに『自分に責任がある』と感じているらしい。

●正面　15センチ
「【落ち着いた、優しい声で。
かつ少し申し訳なさそうに。

予想通り、主人公が優しい言葉を返してきたので】
うん……。
【優しく。
主人公の意見を受け入れた上で、今の自分の気持ちを伝える。
七緒は主人公が眠っている短い間に、次のような事を考えていた。
なので、それを述べていく。
言いながら、どんどん『主人公を好き』という気持ちがあふれてくる。
『あそこ』とは『前日譚トラック07で、自分が理不尽な行動をとった事』を指している】
でもね、あそこで嫌になって当然なのに。
先輩は追いかけてきてくれて。
今もそばに居てくれるだけじゃなくて。
一杯お仕事して、こんな旅行までプレゼントしてくれるんだなぁって。
こんな優しくて、いつも人の事ばっか考えてて。
私の事、こんなに大事にしてくれる人。
この世で絶対先輩だけだよなぁって。
そう思ったら……」

〈主人公〉
「思ったら？」

主人公、きょとんとして七緒を見上げる。
すると七緒が近づいて、左耳にささやく。
これによって声の方向は『正面』から『左』になる。

★左　ささやき　０センチ　※マークのセリフまでささやく
「【普段のテンションに戻って。
あまあまに。
『明るい雰囲気に戻そう』と意識している。
しかし、ひとつ前のセリフと落差がありすぎない程度にかわいく】
『この人の事、ほんと好き。絶対ずっと一緒に居た～い❤』って思いました❤」※

〈主人公〉
「……！」

主人公、完全に不意を打たれて息をのむ。

それを見た七緒は嬉しそうにすると、少し離れて、主人公の顔を覗き込む。
これによって声の方向は『左』から『正面』になる。

●正面　15センチ
「【くすくすと嬉しそうに。
主人公の驚いた顔が、とにかく可愛らしくて仕方ないので】
ふふ」

七緒、近づいて、左耳にささやく。
これによって声の方向は『正面』から『左』になる。

★左　ささやき　0センチ　※マークのセリフまでささやく
「【嬉しそうにひそひそと。
ここからは、完全に先ほどの『謝罪モード』から、いつもの『からかいモード』に戻る】
後それから❤　嬉しくて、ドキドキしちゃって……❤
【甘々にわざとらしく。
『感情が高ぶりすぎて、もう我慢できないかも～❤』という感じで】
お宿着くなり、先輩の事押し倒しちゃいそう……❤

【嬉しそうにひそひそと。
完全に主人公をからかっている】
ていうか、いっそここでしちゃいます？」※

●左　０センチ
「【※１回※　キスする。　左耳に、軽く音を立ててキスする】
ちゅ❤」

そして、またも主人公はキスされた。
先ほどはついうっかりスルーしてしまったが、さすがに今度は注意せねばならない。

〈主人公〉
「ちょ❤　おい……❤　ここは電車なんだぞ！
いくら平日で人少ないからって。
だめ❤　ダメだってばぁ❤」

主人公、誰がどう見ても注意しているとは思えない顔と声で抗議しながら、グーにした両手をぶんぶん振る。

すると七緒は、今度は正面から主人公をからかってくる。
これによって声の方向は『左』から『正面』になる。

●正面　３０センチ
「【きゃっきゃと嬉しそうに。
主人公の反応があまりにも可愛らしいので】
あっはは❤
冗談ですよ❤」

七緒、近づいて、左耳に話しかける。
これによって声の方向は『正面』から『左』になる。

●左　３センチ
「【優しくしっとりと】
でもね。今から言う事は本気です」

七緒、近づいて、左耳にささやく。

★左　ささやき　0センチ　※マークのセリフまでささやく

「【穏やかに、真剣に。
一行ごとにかみしめるように、真摯にこれまでのお礼を言う。
『あの頃』とは『交際前』。
『ダメかも』とは『心が折れてしまいそうかも』。
『どこにも行けない』とは『肉体的にも精神的にも自宅周辺に拘束され、閉塞感を感じ、何の希望も持てずに生きてきた』。
『新しい世界』とは『自分が幸せに暮らせる可能性』という意味で言っている】
先輩。
あの頃、もう全部ダメかもって思う位辛かった私を、助けてくれてありがとう。
弱くて、ダメで。
勝手な私を受け入れてくれてありがとう。
どこにも行けないって思ってた私に、新しい世界を見せてくれてありがとう」

〈主人公〉
「……！」

主人公が目を見開き、驚きで何も言えずにいる中、七緒が続ける。

主人公をこんなに驚かせて、ドキドキさせている事なんてお構いなしに、今日もまた、主人公に愛を伝えてくれる。

七緒、通常の話し方に戻る。

●左　0センチ

「【優しく上機嫌で。
でも、しっとり気味に】
だから。私の全部は、みーんな先輩のものです。
これからも、ずーっとおそばにいさせて下さいね❤」

七緒、左耳にキスする。

●左　0センチ

「【※1回※　キスする。　左耳に、軽く音を立ててキスする】
ちゅ❤」

〈主人公〉

「……っ！」

だから主人公は、今日も泣いてしまった。
泣きすぎである。主人公自身、その自覚はある。
だけど止められないのは『理想の姿に少しでも近づけている』と思えたからだ。
自分はもう『七緒の幼馴染のお姉ちゃん』にはなれない。
七緒の人生から、不安や恐怖を完全に奪う事はできない。
それでも、七緒はそんな主人公がいいと言ってくれる。
そう思ったら、涙が溢れてきてしまったのだ。

七緒、少し離れて、主人公の顔を覗き込む。
これによって声の方向は『左』から『正面』になる。

●正面　15センチ
「【きゃっきゃと嬉しそうに。
甘くからかう。
主人公の泣き顔が、とにかく可愛らしくて、愛おしくて仕方ないので】
あは❤

先輩泣いてる～❤
まだ何もしてないのに～❤」

〈主人公〉
「だってこんなの泣くよ！
泣くに決まってるだろ！」

●正面　15センチ
「【きゃっきゃと嬉しそうに。
甘くからかう。
主人公の泣き顔が、とにかく可愛らしくて、愛おしくて仕方ないので】
かわい～❤
もう。すぐ泣いちゃうんだから❤」

七緒、近づいてキスする。

●正面　0センチ
「【※1回※　キスする。　唇に、軽く音を立ててキスする】

ちゅ❤」

〈主人公〉
「……もう！　なーのばか！　ばかっ！
人の事、すぐからかうんだからっ……！
でも！　そんなの、わたしのセリフなんだからなっ」

●正面　15センチ
「【少し驚いて、ドキッとしている。
正直少し期待はしていたが、主人公がすぐ、自分の告白に返事をくれたので。】
え？」

だが、今日の主人公はここで終わらない。
いつまでもやられっぱなしの主人公ではない。
今日ばかりは、七緒に言いたい事があるのだ。

〈主人公〉
「ずーっとずーっと。一生わたしのそばにいなきゃ、許さないぞ。

なーが嫌って言って逃げたって、何回でも追いかけるし、絶対くっついて暮らすし。
どんな事になっても、絶対大事にするんだからな！」

●正面　１５センチ
「【少し涙ぐんで。
感激して。主人公の言葉が、たとえようもなく嬉しかったので】
先輩……」

一気に言い切ると、今度は七緒が涙を浮かべる。
やはり似たもの同士、さっきからリアクションがかぶり気味である。
……でも、それを主人公は、幸せな事だと感じている。

〈主人公〉
「わ、かっ、た、か？」

●正面　１５センチ
「【少し涙ぐんで。
とても嬉しそうに。主人公の言葉が、たとえようもなく嬉しかったので】

……はい❤」

念を押すと、七緒が微笑んだ。
しかしこのままでいると、ますますお互い泣き出してしまいそうである。
だから主人公は慌てて話題を変えようと、ガイドブックを指さしてみる。
今日の自分達には、これから楽しいことが沢山待っているからだ。

〈主人公〉
「よろしい♪
……じゃあ、そうだな、おっ。お土産でも見るか！
初めての旅行だからさ、みんなにお土産買っていきたいんだ。
特に今回協力してくれてるなーのお店のおばさん達には、お菓子買ってかないと」

●正面　15センチ
「【鼻をすすりつつ、涙をごまかそうとしている。
このままだと、車内で大泣きしてしまいそうなので。
だが、結局ごまかしきれていない。
しかし、本人としては、元のテンションに戻って話題を変えているつもりである。

【ガイドブックの『お勧めお土産』のページを指して言っている】
では気を取り直して❤
お土産チェックでも致しましょうか❤
すうちゃんも、田中さんも、店の皆さんも、私達の親も❤
皆（みんな）楽しみにされてますからね❤」

〈主人公〉
「そうそうっ。今のうちから目星つけとかないと。
結構時間ないから、間に合わなくなるかもしれないもんな。
ていうか、多すぎて帰り、荷物やばい事になりそう♪」

今後もきっと自分達には、色んな事があるのだろう。
その度にこれまでみたいに主人公がつい口を滑らせたり、七緒が不安定になったりして、その度にお互いがお互いに本心を伝えたり、改善案を出したり、受け入れたりしながら、問題を乗り越えていくのだろう。
もしかすると『本当に乗り越えられるのだろうか』という問題に直面することもあるのかもしれない。

●正面　１５センチ
「【少し涙ぐんで。とても幸せそうに】
はい❤　皆さんの為にも、良さそうな物リストアップしてきましょう♪」

でも。主人公は思う。

わたしがなーを大好きで、なーも同じ気持ちでいてくれる限り、わたしたちはきっと大丈夫だ。
もし仮に、その条件が崩れそうになった時も、わたしが何とかする。
だって、なーの事を好きじゃないわたしなんて、もうありえない。
その位、なーはわたしにとって、自分の幸せそのものみたいな存在なんだもん。
と。
そんな事を考えていると、七緒がまた左耳に唇を寄せ、話し始める。
七緒、近づくと、左耳にキスする。

●左　０センチ
「【※１回※　キスする。　左耳に、軽く音を立ててキスする】
ちゅっ」

こんな風にまたキスなんかして、その癖、またすごく真剣な声音で、こんな事を言う。

●左　０センチ
「【※マークまで、涙声で、とても幸せそうに。
幸せで、嬉しい気持ちでいっぱいになって】
先輩。大好きです。
七緒は生涯❤　先輩が大好きです。
それだけは。
【あえて、前日譚０９『ご挨拶』の時の言い方（資料音源参照）に寄せた言い方をする。
かつ、さらに甘々に言う。
『ご挨拶』をすでに聞いている聞き手が『あっ！　故意に寄せつつ、パワーアップしている！』と気づく事を狙いにする】
ちゃんと覚えてて下さいね？」※

〈主人公〉
「！」

だから主人公は、またしても負けてしまいながらも、幸せな気持ちでいっぱいになる。
やっぱり自分達の考えている事は同じだ。
そう思えたからだ。

七緒、ここで一度『自分の言いたい事は言い終えた』かのようなそぶりをする。
だけど少しだけ間を置くと、そのまま、左耳にささやく。

★左　ささやき　０センチ　※マークのセリフまでささやく
「【涙声でしっとりと。
とても幸せそうに】
※特に聞き手をドキッとさせるイメージでお願いします
愛してますよ」※

●左　０センチ
「【とても幸せそうに笑う。

主人公が自分のフェイントに見事に引っかかり、驚いているのが、とにかく可愛らしいので】

ふふ❤」

主人公のすぐ隣で七緒が微笑み、主人公は照れながらも重ねた手に指を絡めて、深く頷く。

それから、

……ああ、そうだ。夢の話をしなくちゃ。

夢の中でちっちゃい頃のなーに出会って、色んな事に気づいたんだよって言わなくちゃ――……。

そう思ってゆっくり口を開き、でもまずは、もっと先に伝えたい事を口にすることにした。

〈主人公〉

「わたしも！　なーがずーっと。ずーっと大好きだ……！」

と。

ここでフェードアウトして終了。